山本義美著

『国語科学習指導の探究』

山口・兵庫両県において長年高等学校での実践に携わってきた著者が、昭和四十年から六十一年にかけて執筆・発表した十八編の論考を、本書は所収している。

本書の構成は、

Ⅰ　文学教材の学習指導
　　―課題学習の試みを中心に―
Ⅱ　古典（古文）の学習指導
Ⅲ　国語科学習指導の過程と方法
Ⅳ　文章・文体の学習指導

となっており、それぞれに示唆に富み、啓発される所が多い。

その中でも、特に高等学校の現場に対する有益な指導法の提示になっていると思われるのはⅠの「課題学習」の方法とⅡの「古典の学習指導」であろう。

課題学習には、ともすれば「設問の配列が羅列的で学習の中心が不明」になりやすく、「この学習法のみに頼る」と自発的学習の態度を阻害しかねないという「不安」がある。その問題に対して著者は「指導者としては積極的主体的に作品と取り組み、問題を解決することに喜びを見いだせる人間を期待し、自主的な学習態度の養成をねらったつもりである。しかし、現実には生徒の大半は消極的意義しか認めていない。この現実のギャップをどのようにして埋めるべきか。」（三一ページ）また、「彼らの文学的興味を高め、文学の目を開かせるためには、彼らだけの設問では掘り起こしの深度は浅い。彼らの把握した問題を尊重しながら、彼らの気づいていない問いを投げかけてやらなくてはならない。彼らの主体的学習を手助けし、より深く内容に、主題に迫りいく条件を整えてやることが大切である。また、考えるための示唆を与える設問を作成しなくてはならない。」（三〇ページ）と述べる。著者の授業に対する理論は前述の理念のもとに展開し、Ⅱの

1　万葉集の学習―特に山上憶良について―
2　平安朝　服飾の学習―枕草子を中心として―
3　教材化、力の養成―「今昔物語」の場合―

の三編に記録されるような実践に一つの結実をみる。それは、例えば、2の実践記録の冒頭で「古典の学習がただ単に古語の意

味を理解し、古典読解の技能養成に終わってはならない。そのことはわかっていても、いわゆる『ことばいじり』になってしまいがちです。」と述べ、その打開策としてこれらの実践を行っているところにも現われている。

本書は、高等学校の実践の場からは離れた著者が、それまでの自身の国語科学習指導のあり方のエッセンスを纏めたものといえ、研究の一つの区切りを飾るにふさわしい著作であろうと思う。

（A5判、二三七ページ、昭和六十三年十月十五日発行、渓水社刊、三、五〇〇円）

（福島　浩介）